

『慶應マーケティング論究』
第18巻 (Spring, 2022)

遠方の他者に対する寄付意向 ——レジデンシャルモビリティとローカル関連性に着目して——

加藤 愛奈

既存研究は、レジデンシャルモビリティが高水準の寄付者は、引っ越しによって様々な文化や価値観に触れるため、遠方の他者との繋がりを感じやすく、それゆえに、遠方の他者に対して高水準の寄付意向を形成すると主張した。しかしながら、彼らは、レジデンシャルモビリティが低水準の寄付者であっても遠方の他者に対して高水準の寄付意向を形成する要因を模索していない。本論は、その要因として、要寄付事情のローカル関連性に着目して、実証分析を実施する。

第1章 はじめに

世界中には、自然災害や貧困などの問題に苦しむ人々が数多く存在する。「ユニセフ協会」や「Save the Children」をはじめとする数々の慈善団体は、犠牲者の支援や問題の根本的解決を目的として、日々尽力している。彼らが力を入れる活動の1つに、募金活動が挙げられる。彼らが人々から寄付を募る方法には、一度申し込めば毎月定額が自動的に引き落とされる「マンスリーサポート・プログラム」の実施や、コンビニエンスストアやスーパーマーケットのレジ脇への募金箱の設置などがある (cf. 日本ユニセフ協会 HP)。

一般的に、寄付者は、アメリカや日本などの先進国に多いのに対して、寄付受益者は、アフリカや中東などの発展途上国に多い。すなわち、寄付者と寄付受益者との距離が遠い場合が多い。しかしながら、寄付者と寄付受益者との距離が遠い場合の方が、近い場合より低水準の寄付意向しか形成されないということが知られている (Reed and Aquino, 2003; Winterich, Mittal, and Ross, 2009; Duclos and Barasch, 2014; Cavanaugh, Bettman, and Luce, 2015; Touré-Tillery and Fishbach, 2017)。実際に、アメリカにおいては、寄付者のわずか7%以下しか、他国の慈善団体に寄付をしていないという (cf. Giving USA HP)。この問題は、それを解消したい慈善団体による実務的な関心が高いのは無論のこと、マーケティング研究者による学術的な関心も高く、それゆえに、遠方の他者に対する寄付意向に関する数多くの研究が為される結果へと帰着してきた。

遠方の他者に対する寄付意向に影響を与える要因を探究した Wang, Kirmani, and Li (2020) は、レジデンシャルモビリティ (residential mobility) という概念に着目した。レジデンシャルモビリティとは、一定期間に経験した、または、これから経験する予定の引っ越しの回数を指標として測定される、ある個人の居住地の移動性の程度のことであり (Oishi, 2010)、酷似する概念に、居住地の不安定性 (residential instability) (Sampson, 1988) や、地理的な移動性 (geographical mobility) (Triandis, 1989) などが挙げられる。Wang, et al. (2020) は、レジデンシャルモビリティが高水準の寄付者は、引っ越しによって様々な文化や

価値観に触れるため、近隣の他者のみならず、遠方の他者とも繋がりを感じやすく、それゆえに、遠方の他者に対しても高水準の寄付意向を形成すると主張した。Wang, *et al.* (2020) は、レジデンシャルモビリティという、遠方の他者に対する寄付意向に影響を与える要因を見出したという点において、非常に有意義な研究であると評しうるであろう。

しかしながら、Wang, *et al.* (2020) は、重要な研究課題を残しているとも指摘しうる。その課題とは、レジデンシャルモビリティが低水準の寄付者であっても遠方の寄付者に対して高水準の寄付意向を形成する要因を模索するという課題である。Wang, *et al.* (2020) は、レジデンシャルモビリティが低水準の寄付者は、引っ越しによって様々な文化や価値観に触れることがないため、遠方の他者との繋がりを感じにくく、それゆえに、遠方の寄付受益者に対して低水準の寄付意向しか形成しないと主張した。しかし、たとえ寄付受益者との距離が遠くとも、寄付者が寄付受益者に対して強い共感を抱く場合においては、寄付意向は高水準になりうるであろう。その場合とは、具体的には、寄付受益者が寄付を必要とする原因に係る事情（要寄付事情）が、寄付受益者の地元とは異なる寄付者の地元においても、寄付者が同じ事情を抱えたことがある、あるいは、今後抱えそうである、という意味において、寄付者の地元と関連している程度（ローカル関連性）が高水準である場合、すなわち、要寄付事情のローカル関連性が高水準である場合である。

かくして本論は、要寄付事情のローカル関連性という概念を新たに考慮に入れた上で、レジデンシャルモビリティが高水準の寄付者と低水準の寄付者の間の、遠方の他者に対する寄付意向に関する比較の再実施を試みる。そして、既存研究が主張しているように、遠方の寄付受益者に対して、レジデンシャルモビリティが高水準の寄付者の方が、レジデンシャルモビリティが低水準の寄付者より、常に高水準の寄付意向を形成するのかどうか、ということを議論する。そうすることによって、本論は、遠方の他者に対する寄付意向に関する研究に大きな前進をもたらすことを試みる。そして、レジデンシャルモビリティという要因に要寄付事情のローカル関連性という新たな要因を組み合わせて、いかにすれば遠方の他者に対する寄付意向を向上させることができるのかという実務的課題に関する、既存研究より豊かで精緻な含意を、世界中の慈善団体をはじめとする人々に対して提供する。

第2章 既存文献レビュー

2-1. レジデンシャルモビリティが人の心理と行動に与える影響

レジデンシャルモビリティとは、一定期間に経験した、または、これから経験する予定の引っ越しの回数を指標として測定される、ある個々人の居住地の移動性の程度のことである (Oishi, 2010)。この概念は、移動性に関する研究に端を発する。社会学における移動性 (mobility) に関する研究において、人の移動性の程度によって、人の心理・行動・集団をコミュニティ (community) と社会 (society) に分類した Tönnies (1887) をはじめとして、空間的な移動性 (spatial mobility) (Parsons, 1951)、居住地の不安定性 (residential instability) (Sampson, 1988)、地理的な移動性 (Triandis, 1989)、さらに、居住の期間 (Sampson,

1991) といった、レジデンシャルモビリティと酷似する概念に関して数多くの研究が行われてきた。

この概念をグローバルマーケティング論に採用した Oishi (2010) は、レジデンシャルモビリティが人の心理や行動に与える影響について、以下の4点を主張した。

1 点目は、レジデンシャルモビリティが上昇することによって、集団の一員としての自己（例えば、大学生や所属チームのメンバーなど）より、一個人としての自己（例えば、正直者や努力家など）が重視されるようになるという点である。具体的には、集団の一員としての自己を重視して、自身のことを大学生や所属チームのメンバーなどと表現していた人が、レジデンシャルモビリティが上昇すると、一個人としての自己を重視して、自身のことを正直者や努力家などと表現するようになる。なぜなら、これまで全く、あるいは滅多に引っ越しを経験したことがなく、長期間同一の集団に所属している場合においては、集団の中での役割や名称について共通認識があるため、それらに基づいて集団における他者を評価するのに対して、頻繁に引っ越しを経験し、短期間しか同一の集団に所属しないような状況に身を置くようになった場合においては、集団の中での役割や名称について共通認識が失われるため、それらの代わりに、個人の能力や個人が持つ技術が分かるような事柄に基づいて、他者を評価するからである (cf. Parsons, 1951)。

2 点目は、レジデンシャルモビリティが上昇することによって、人間関係に対する考え方が変容するという点である。具体的には、責務を伴う人間関係を構築していた人が、レジデンシャルモビリティの上昇によって、責務を伴わない人間関係を構築するようになる。なぜなら、これまで全く、あるいは滅多に引っ越しを経験したことがなく、長期間同一の集団に所属している場合においては、集団内の関係が緊密であるのに対して、頻繁に引っ越しを経験し、短期間しか同一の集団に所属しないような状況に身を置くようになった場合においては、集団内の関係が希薄になるからであるという。社会的交流とは基本的に互惠関係にあり (cf. Gouldner, 1960)、もし集団に所属する人のうちの1人が互惠関係を破った場合、緊密な集団に所属している状況においては、その集団によって制裁が加えられるのに対して、希薄な集団に所属している状況においては、その限りではないのである (cf. Ho, Rousseau, and Levesque, 2006)。

3 点目は、レジデンシャルモビリティが上昇することによって、対人的な幸福より個人的な幸福が追求されるようになるという点である。具体的には、社会からの応援や集団としての自己の承認などに基づく幸福を追求していた人が、レジデンシャルモビリティが上昇すると、自尊感情や一個人としての自己の承認などに基づく幸福を追求するようになる。なぜなら、レジデンシャルモビリティが高水準の方が、レジデンシャルモビリティが低水準の人より、集団としての自己より一個人としての自己を重視しやすく、それゆえに、彼らにとって、一個人としての自己が承認されることに対する満足の方が、集団としての自己が承認されることに対する満足より高いからである。

4 点目は、レジデンシャルモビリティが上昇することによって、心身に悪影響が及ぶという点である。具体的には、レジデンシャルモビリティが上昇すると、幸福度が低下し、死亡リスクが上昇する。なぜなら、引っ越しによる既存の人間関係の崩壊が、幸福度と健康に悪影響を与えるからである。また、この傾向は、内向的な性格の人において特に顕著であるという。なぜなら、一般的に内向的な性格の方が、外交的な性格の人より人間関係を新しく構築することが苦手であり、新たな人間関係の構築が必要となる引っ越しを、大きな精神的負担として知覚するからである。

2-2. レジデンシャルモビリティが寄付意向に与える影響

レジデンシャルモビリティが寄付意向に与える影響に関する研究は少ないものの、向社会的行動 (prosocial behavior) に与える影響については、数多くの研究が為されてきた。向社会的行動とは、環境に優しい商品の購買や、時間やお金の献上などといった、他の人に利益をもたらす行動全般を指す (Touré-Tillery and Fishbach, 2017)。レジデンシャルモビリティと向社会的行動に関する研究の大半は、レジデンシャルモビリティは向社会的行動に負の影響を与えると主張する研究である。

例えば、Oishi, Rothman, Snyder, Su, Zehm, Hertel, Gonzales, and Sherman (2007) は、レジデンシャルモビリティの上昇が地元のスポーツチームの応援などの向社会的行動の減少に帰着するというところを見出した。また、レジデンシャルモビリティの上昇が犯罪行為などの社会的破壊行動の増加を引き起こすということを報告した研究群もある (e.g., Shaw and McKay, 1942; Sampson and Groves, 1989; Sampson, Raudenbush, and Earls, 1997)。さらに、O'Brien, Gallup, and Wilson (2012) は、レジデンシャルモビリティが低水準の学生の人助け精神 (helping tendency) が高水準であるのに対して、レジデンシャルモビリティが高水準の学生の人助け精神は低水準である、ということを見出した。ただし、これらの研究対象は、地元に対する向社会的行動に限定されてきた。

Wang, *et al.* (2020) は、向社会的行動の中でも寄付行動に焦点を合わせた上で、遠方の他者に対する寄付意向と、レジデンシャルモビリティの関係について探究した。そして、レジデンシャルモビリティが遠方の他者に対して高水準の寄付意向を形成させると主張した。なぜなら、引越越しによって様々な文化や価値観に触れた人は、遠方の他者との繋がりを感じやすくなるからである。彼らは、アメリカで実施した実験に際して、2水準の寄付者と寄付受益者との距離 (遠い vs. 近い) を基準にして、被験者を2グループに分類した後、各グループの被験者を、引越越し経験の有無によって、2水準のレジデンシャルモビリティ (高水準 vs. 低水準) を基準にして、さらに分類した。一方の寄付受益者との距離が遠い寄付者グループ群には、アメリカ国外における子供の飢餓問題解決キャンペーン (No Kid Hungry Campaign) を、他方の寄付受益者との距離が近い寄付者グループ群には、被験者の地元における同様のキャンペーンを支援するための架空の寄付を募るシナリオを読んでもらった。そして、全てのグループの被験者に\$10.00のボーナスを得たと想定してもらった上で、そのうちのいくらかを寄付するかという質問に回答するよう依頼した。二元配置分散分析の結果、寄付受益者との距離が遠い寄付者グループ群においては、レジデンシャルモビリティが高水準のグループの方が、レジデンシャルモビリティが低水準のグループより寄付額が高水準であるということが見出された。そして、寄付受益者との距離が近いグループ寄付者群においては、レジデンシャルモビリティが低水準のグループの方が、レジデンシャルモビリティが高水準のグループより寄付額が高水準であるということが見出された。以上の結果より、彼らは、レジデンシャルモビリティは、遠方の寄付受益者に対する寄付意向を向上させる、と結論づけた。

2-3. 共感が寄付意向に与える影響

共感とは、道徳心の発達 (Eisenberg and Mussen, 1978)、利他主義の誘発 (Batson, Duncan, Ackerman,

Buckley, and Birch, 1981)、親密な人間関係の構築と維持 (Eisenberg and Miller, 1987)、攻撃的行動の抑制 (Miller and Eisenberg, 1988)、集団間交流の促進 (Gutsell and Inzlicht, 2010) などにおいて、重要な役割を担っている。Krol and Bartz (2021) によると、共感の明確な定義については、その複雑性と多面性ゆえに、未だ議論の余地が残されているものの、一般的に、共感とは、他者の感情を正確に理解し、共有することであると捉えられている。

また、共感が他者への助力を動機付けるという現象が、数多くの既存研究によって見出されてきた (e.g., Aderman and Berkowitz, 1970; Aronfreed, 1970; Mehrabian and Epstein, 1972; Harris and Huang, 1973; Krebs, 1975; Coke, Batson, and McDavis, 1978)。そして、このような現象が生起する理由として、いくつかの理由が挙げられている。一方においては、他者の苦痛を取り除いてあげたいという利他的な感情が、他者への助力を動機付けると説く研究群 (cf. Aronfreed, 1970; Hoffman, 1975; Krebs, 1975; Batson, Darley, and Coke, 1978) があり、他方においては、相手の苦痛を理解しながらも助力しなかった場合に自身が経験する、罪悪感 (guilt) あるいは羞恥 (shame) を取り除きたいという利己的な感情が、他者への助力を動機付けると説く研究 (cf. Batson, *et al.*, 1981) もある。いずれにせよ、人は、他者に対して強い共感を抱くほど、高水準の助力意向を形成する傾向を有するのである (Aderman and Berkowitz, 1970)。それゆえに、寄付者が寄付受益者に対して強い共感を抱く場合においては、高水準の寄付意向が形成されやすいと考えられるであろう。

第3章 仮説提唱

第2-2節において概観したとおり、Wang, *et al.* (2020) は、レジデンシャルモビリティが遠方の寄付受益者に対する寄付意向を向上させるということを見出した。しかしながら、彼らは、レジデンシャルモビリティが低水準の寄付者であっても遠方の寄付者に対して高水準の寄付意向を形成する要因を模索するという課題を抱えている。

ここで、第1章において言及したとおり、本論は、寄付意向に影響を与える要因として、要寄付事情のローカル関連性に着目する。要寄付事情のローカル関連性とは、寄付受益者が寄付を必要とする原因に係る事情 (要寄付事情) が、寄付受益者の地元とは異なる寄付者の地元においても、寄付者が同じ事情を抱えたことがある、あるいは、今後抱えそうである、という意味において、寄付者の地元と関連している程度 (ローカル関連性) が高水準であると知覚される程度のことである。例えば、日本人の寄付者にとって、寄付受益者が寄付を必要とする事情、例えば津波被害は、高水準のローカル関連性を有する。なぜなら、日本は津波被害を世界で最も強く受けている国 (cf. Stacker HP) であり、津波被害は、日本人の寄付者にとってローカル関連性が高水準であるような要寄付事情だからである。それに対して、寄付受益者が寄付を必要とする事情、例えばハリケーン被害は、低水準のローカル関連性しか有さない。なぜなら、ハリケーンは北部大西洋、北太平洋中央部および東部においてしか発生しない暴風 (cf. American Red Cross HP) であり、ハリケーン被害は、日本人の寄付者にとってローカル関連性が低水準であるような要寄付事情だからである。

寄付受益者が遠方に居住しており、なおかつ、要寄付事情のローカル関連性が低水準である場合には、Wang, *et al.* (2020) が主張したとおり、レジデンシャルモビリティが高水準の寄付者は、高水準の寄付意向を形成するであろう。なぜなら、レジデンシャルモビリティが高水準の寄付者は、引っ越しによって様々な文化や価値観に触れてきたために、遠方の他者との繋がりを感じやすいからである。他方、レジデンシャルモビリティが低水準の寄付者は、近隣の他者との繋がりを感じやすいものの、遠方の他者との繋がりを感じにくく、それゆえに、遠方の寄付受益者に対しては低水準の寄付意向しか形成しないであろう。

しかしながら、たとえ遠方の寄付受益者であっても、要寄付事情のローカル関連性が高水準である場合においては、レジデンシャルモビリティが低水準の寄付者は、高水準の寄付意向を形成するであろう。なぜなら、レジデンシャルモビリティが低水準の寄付者は、長期間、地元に住居してきたため、ローカル関連性が高水準であるような要寄付事情を抱える寄付受益者に対して強い共感を抱くと考えられるからである。要寄付事情のローカル関連性が高水準である場合において、寄付者が寄付受益者に対して強い共感を抱く理由は、共感とは、他者の感情を正確に理解し、共有すること (Krol and Bartz, 2021) であるということ、そして、寄付者は、ローカル関連性が高水準であるような要寄付事情については、同じ事情を抱えたことがある、あるいは、今後抱えそうであるということから、寄付受益者の感情を正確に理解し、共有しやすいと考えられるということである。

他方、レジデンシャルモビリティが高水準の寄付者は、要寄付事情のローカル関連性が高水準である場合において、高水準の寄付意向を形成することはないであろう。なぜなら、レジデンシャルモビリティが高水準の寄付者は、頻繁に引っ越しを経験しており、短期間しか同一の土地に住居していないため、同じ事情を抱えたことがある可能性、あるいは、今後抱える可能性が低いことから、ローカル関連性が高水準であるような要寄付事情を抱える寄付受益者に対して、弱い共感しか抱かないからである。そればかりではなく、彼らは、要寄付事情のローカル関連性が高水準であることに起因して、むしろ低水準の寄付意向しか形成しないと考えられるであろう。なぜなら、レジデンシャルモビリティが高水準の寄付者は、地元に対する向社会的行動を指向しない (Oishi, *et al.*, 2007) のと同様に、ローカル関連性が高水準の要寄付事情を抱える寄付受益者に対して低水準の寄付意向しか形成しないと考えられるからである。以上の議論より、次の仮説を提唱する。

仮説 寄付者と寄付受益者の距離が遠いことを所与として、寄付者のレジデンシャルモビリティ (高水準 vs. 低水準) と寄付者が選好する要寄付事情のローカル関連性 (高水準 vs. 低水準) には関連がある。

系 1 寄付者と寄付受益者の距離が遠いことを所与として、レジデンシャルモビリティが高水準の寄付者は、要寄付事情のローカル関連性が低水準であるような寄付を選好する。

系 2 寄付者と寄付受益者の距離が遠いことを所与として、レジデンシャルモビリティが低水準の寄付者は、要寄付事情のローカル関連性が高水準であるような寄付を選好する。

第4章 実験

4-1. 実験の概要

前章において提唱した仮説の経験的妥当性を吟味するために、消費者実験を実施して、データを収集した。実験の被験者は、18歳～24歳の日本国内の大学生97名（うち男性56名、女性41名）で、年齢の中央値は22歳であった。

実験に際しては、架空の自然災害に対する寄付を呼び掛けるポスターを作成した。また、架空の自然災害として被験者に想定してもらったのは、津波被害とハリケーン被害であった。一方の津波被害は、ローカル関連性が高水準の要寄付事情として採用した。なぜなら、日本は津波被害を世界で最も強く受けている国（cf. Stacker HP）であり、津波被害は日本人の寄付者にとってローカル関連性が高水準の要寄付事情であると考えられるからである。他方のハリケーン被害は、ローカル関連性が低水準の要寄付事情として採用した。なぜなら、ハリケーンは北部大西洋、北太平洋中央部および東部においてしか発生しない暴風（cf. American Red Cross HP）であり、ハリケーン被害は日本人の寄付者にとってローカル関連性が低水準の要寄付事情であると考えられるからである。

実験の手続きは、以下のとおりであった。まず、被験者97名を、Wang, *et al.* (2020) に倣って、引越経験の有無を基準にして、「レジデンシャルモビリティが低水準の寄付者グループ（以下、低水準RMグループ）」（ $N=46$ ）と「レジデンシャルモビリティが高水準の寄付者グループ（以下、高水準RMグループ）」（ $N=51$ ）に分類した。そして、両方のグループの被験者に、「あなたは先ほど、アルバイト先でボーナスとして、1,000円を受け取った。帰りに立ち寄ったスーパーのレジで、あなたは写真のような2種類のポスターを提示され、寄付を頼まれた。」というシナリオを読んでもらった後、ローカル関連性が低水準の要寄付事情であると考えられるシナリオA「アメリカのA町で大きなハリケーンが発生し、家や学校が吹き飛ばされました。」が記載されたポスターAと、ローカル関連性が高水準の要寄付事情であると考えられるシナリオB「アメリカのB町で大きな津波が発生し、家や学校が流されました。」が記載されたポスターBを提示した。そして、ボーナスの1,000円を全て寄付する場合を想定してもらい、「A町のハリケーン被害に多く寄付する。」および「B町の津波被害に多く寄付する。」という2つの選択肢から、自身が採ると考えられる行動を1つ選んで回答するよう、被験者に依頼した。なお、実際に提示した調査票は、補録1に示されるとおりであった。

4-2. プレテスト

作成した架空のシナリオが、本論の意図どおりに、ローカル関連性が高水準であるような要寄付事情とローカル関連性が低水準であるような要寄付事情として被験者に知覚されるということを確認し、また、補足的に、寄付者が、ローカル関連性が高水準であるような要寄付事情を抱えた寄付受益者に対しては強い共感を抱き、ローカル関連性が低水準であるような要寄付事情を抱えた寄付受益者に対しては弱い共感しか抱かないということを確認するために、プレテストを実施した。被験者は、18歳～24歳の日本国内

の大学生 70 名（うち男性 33 名、女性 36 名、無回答 1 名、年齢の中央値は 22 歳）であった。

被験者には、ローカル関連性が低水準であるような要寄付事情であると考えられるシナリオ *A* が記載されたポスター *A* と、ローカル関連性が高水準であるような要寄付事情であると考えられるシナリオ *B* が記載されたポスター *B* を提示し、それぞれの要寄付事情に対して知覚するローカル関連性の水準と、それぞれの要寄付事情を抱えた寄付受益者に対して抱く共感の水準を回答するよう依頼した。プレテストにおいて採用された尺度は、7 点リカート尺度法（「1：強く否定する」～「7：強く同意する」）であり、「*A* 町/*B* 町が遭った被害は、自分（あなた）の地元と関連性が強いと思う。」および「被害に遭った *A* 町/*B* 町に対して、自分（あなた）は共感する。」という質問項目に対して、1～7 のうち最も同意できる 1 つの値を選択するよう、被験者に依頼した。なお、実際に提示した調査票は、補録 2 に示されるとおりであった。

回答データを収集した後、まず、シナリオ *A* とシナリオ *B* との間で、被験者がそれぞれの要寄付事情に対して知覚するローカル関連性の水準の差異について検定を実施した。事前に、Shapiro-Wilk 検定を実施した結果、*t* 検定を実施する上での前提条件である、標本の正規性という条件が成立していないということが疑われる証拠が得られたため（ $W_A=0.705$, $p<0.001$ 、および $W_B=0.862$, $p<0.001$ ）、符号付順位和検定を実施した。検定の結果、被験者がシナリオ *A* に対して知覚したローカル関連性の水準の中央値は 2.000（第 1 四分位数は 1.000、第 3 四分位数は 2.000）であったのに対して、シナリオ *B* に対して知覚したローカル関連性の水準の中央値は 4.000（第 1 四分位数は 2.000、第 3 四分位数は 6.000）であり、その差異は 1% 水準で有意であった（ $S=-488.500$, $p<0.001$ ）。

同様に、シナリオ *A* とシナリオ *B* との間で、被験者がそれぞれの要寄付事情を抱えた寄付受益者に対して抱く共感の程度の差異について検定を実施した。事前に、Shapiro-Wilk 検定を実施した結果、*t* 検定を実施する上での前提条件である、標本の正規性という条件が成立していないということが疑われる証拠が得られたため（ $W_A=0.923$, $p<0.001$ 、および $W_B=0.798$, $p<0.001$ ）、符号付順位和検定を実施した。検定の結果、被験者がシナリオ *A* に陥った寄付受益者に対して抱いた共感の中央値は 5.000（第 1 四分位数は 3.000、第 3 四分位数は 6.000）であったのに対して、シナリオ *B* に陥った寄付受益者に対して抱いた共感の中央値は 6.000（第 1 四分位数は 5.000、第 3 四分位数は 7.000）であり、その差異は 1% 水準で有意であった（ $S=-510.000$, $p<0.001$ ）。

かくして、検定の結果、本論が作成したシナリオ *A* およびシナリオ *B* は、それぞれ、本論の意図どおりに、寄付者が寄付受益者に対して弱い共感しか抱かないローカル関連性が低水準であるような要寄付事情、および、寄付者が寄付受益者に対して強い共感を抱くローカル関連性が高水準であるような要寄付事情として、被験者に知覚されるシナリオであると見なしうるであろう。

4-3. 分析結果

収集したデータを用いて、低水準 RM グループおよび高水準 RM グループにおいて、「*A* 町のハリケーン被害に多く寄付する。」を選んだ被験者数と、「*B* 町の津波被害に多く寄付する。」を選んだ被験者数との間の差異について、 χ^2 検定を実施した。検定の結果は、図表 1 に要約されるとおりであった。低水準 RM グループにおいて、「*A* 町のハリケーン被害に多く寄付する。」を選択した被験者は 46 名中 3 名

(6.52%) であり、「B町の津波被害に多く寄付する。」を選択した被験者は46名中43名(93.47%)であった。また、高水準RMグループにおいて、「A町のハリケーン被害に多く寄付する。」を選択した被験者は51名中12名(23.529%)であり、「B町の津波被害に多く寄付する。」を選択した被験者は51名中39名(76.471%)であった。そして、 χ^2 値は5.352という値を表し、5%水準で有意であった($p=0.021$)。

図表1 クロス集計および χ^2 検定の結果

	「A町のハリケーン被害に多く寄付する。」を選択した被験者	「B町の津波被害に多く寄付する。」を選択した被験者	合計
低水準RMグループ	3 (6.52%)	43 (93.48%)	46
高水準RMグループ	12 (23.53%)	39 (76.47%)	51
合計	15	82	97

χ^2 値=5.352, $p=0.021$

以上の結果から、レジデンシャルモビリティが低水準の寄付者は、ローカル関連性が高水準であるような要寄付事情に対して高水準の寄付意向を形成するのに対して、レジデンシャルモビリティが高水準の寄付者は、ローカル関連性が高水準であるような要寄付事情に対して低水準の寄付意向を形成するということが示唆された。それゆえに、本論の仮説「寄付者と寄付受益者の距離が遠いことを所与として、寄付者のレジデンシャルモビリティ（高水準vs.低水準）と寄付者が選好する要寄付事情のローカル関連性（高水準vs.低水準）には関連がある。」は、その2つの系と共に支持されたと言いうるのである。

第5章 おわりに

5-1. 学術的貢献

本論は、次のような学術的貢献を成した。それは、レジデンシャルモビリティが寄付意向に与える影響に関する研究において、要寄付事情のローカル関連性に初めて着目したという点である。そうすることによって、本論は、Wang, *et al.* (2020) が模索できていなかった、レジデンシャルモビリティが低水準の寄付者が遠方の寄付受益者に対して高水準の寄付意向を形成する可能性を探究した。

既存研究は、遠方の寄付受益者に対して、レジデンシャルモビリティが高水準の寄付者の方が、レジデンシャルモビリティが低水準の寄付者より高水準の寄付意向を形成すると主張した。たしかに、本論においても、レジデンシャルモビリティが高水準の寄付者が、要寄付事情のローカル関連性が低水準であるような寄付に対して、積極的に寄付意向を形成するであろうということが見出された。しかしながら、レジデンシャルモビリティが低水準の寄付者も、要寄付事情のローカル関連性が高水準であるような寄付に対しては、レジデンシャルモビリティが高水準の寄付者よりむしろ積極的に寄付意向を形成するであろうということが新たに見出された。

5-2. 実務的含意

本論から得られた上記の知見には、次のような実務的含意が内包されている。慈善団体は、寄付者と寄付受益者との距離が遠い場合に、寄付者のレジデンシャルモビリティと要寄付事情のローカル関連性を考慮に入れて募金の広報活動を行うべきである。本論の知見によると、要寄付事情のローカル関連性が高水準であるような寄付は、レジデンシャルモビリティが低水準の寄付者に選好されるのに対して、要寄付事情のローカル関連性が低水準であるような寄付は、レジデンシャルモビリティが高水準の寄付者に選好される。したがって、人の流動性が低い地域（例えば、田舎）においては、ローカル関連性が高水準であるような要寄付事情を抱えた寄付受益者に対する募金活動を実施するべきである一方で、人の流動性が高い地域（例えば、都会）においては、ローカル関連性が低水準であるような要寄付事情を抱えた寄付受益者に対する募金活動を実施するべきであろう。

5-3. 本論の限界

本論は、いくつかの限界を抱えている。第1に、本論の実験の被験者が、予算および時間の制約ゆえに、日本国内の大学生に留まったという点である。日本人の多くは寄付行動の習慣がない（cf. CAF World Giving Index HP）上に、大学生は経済的余裕があまりないため、日本国内の大学生は、他の国籍あるいは年齢層と比べて、低水準の寄付意向しか形成しないと考えられる。今後の研究においては、寄付行動の習慣と経済的余裕がある国籍や年齢層を対象に実験を実施することによって、本論が提唱した仮説の経験的妥当性を吟味することが望まれるであろう。

第2に、要寄付事情のローカル関連性と遠方の他者に対する寄付意向との関係が、寄付者が寄付受益者に対して共感する程度によって媒介されているかどうかについて、媒介分析を実施していないという点である。レジデンシャルモビリティが低水準の寄付者の寄付意向に対して、要寄付事情のローカル関連性が与える影響は、共感によって媒介されると考えられる。今後の研究においては、寄付者が寄付受益者に対して共感する程度を分析の対象にした上で、要寄付事情のローカル関連性が寄付意向に与える影響が、寄付者が寄付受益者に対して共感する程度によって媒介されるかどうかを研究することによって、本論の仮説を吟味することが望まれるであろう。

第3に、実験に際して被験者に想定してもらったのが、架空の津波とハリケーンという自然災害のみに限定された点である。実際には例えば、干ばつや地震といった自然災害や、テロや戦争といった人為的な被害などの多様な要寄付事情を抱えた寄付受益者が寄付対象である。今後の研究においては、そうした多様な対象を考慮に入れることによって、本論の主張の普遍性を吟味することが望まれるであろう。

5-4. 今後の課題

本論は、次のような課題を今後の研究に残している。例えば、飽食で知られる日本における多くの人々にとって、飢餓問題はあまり身近ではないと考えられる。しかしながら、日本人は、自国が飽食であるか

らといって、飢餓で苦しむ人々への寄付を諦めるべきであるというわけではない。むしろ、本来、寄付とは、経済的余裕がある人が経済的余裕がない人を支援するために採る行動であり、たとえ要寄付事情のローカル関連性が低水準であろうとも、世界有数の先進国である日本からの寄付はあって然るべきである。このような、遠方の寄付受益者で、なおかつ、要寄付事情のローカル関連性が低水準である場合に関する学術的および実務的課題に対して、本論は、貢献できていない。今後の研究は、要寄付事情のローカル関連性が低水準である場合における寄付意向を向上させることのできる、レジデンシャルモビリティ以外の要因を模索することが望まれるであろう。このような課題を残しているとはいえ、本論は、レジデンシャルモビリティと寄付意向の関連性に関する研究において、要寄付事情のローカル関連性という概念に初めて着目した上で、レジデンシャルモビリティが低水準の寄付者は、要寄付事情のローカル関連性が高水準であるような寄付に対しては、レジデンシャルモビリティが高水準の寄付者よりむしろ積極的に寄付意向を形成する、という知見を提供した点において、今後の寄付意向の研究の発展に貢献したと断言するであろう。

(記) 本論の執筆に際してお力添えをいただきました多くの方々に、この場をお借りして感謝の意を申し上げます。慶應義塾大学商学部小野晃典先生には、テーマの案出から論文の完成に至るまで、たくさんのご厚情とご指導を賜りました。ご多忙の中いつでも丁寧にご指導くださったこと、そして、私が幾度となくミスを犯しても決して見捨てずに、成長の機会を与え続けてくださったこと、心から御礼申し上げます。本当にありがとうございました。また、ゼミ生の皆さんからも、多くのアドバイスや激励をいただきました。とりわけ、第 16 期生 OB で大学院生の岩間雄亮さんと北澤涼平さんからは、一緒に教室に残っていただいたり、夜分遅くに Zoom を繋げていただいたりして、何度もご助言賜りました。同期生である第 18 期生は、まるで自身の研究かのように、昼夜を問わず共に筆を進めてくれました。後輩である第 19 期生は、ずっと見守り、たくさんの温かい言葉をかけてくれました。そして、執筆中にはゼミ外の人達からも、多くのサポートを受けました。友人らは、私が一体何をしているのかよく分からないながらも常に応援し、心の支えになってくれました。両親は、私が執筆に集中することができる環境を整え、いつも体調を気にかけてくれました。小野先生をはじめとする皆さんのおかげで論文を執筆できた今回の経験は、私の宝物です。改めて、本論の執筆に関わってくださった全ての方々に、厚く御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

参考文献

- Aderman, David and Leonard Berkowitz (1970), "Observational Set, Empathy, and Helping," *Journal of Personality and Social Psychology*, Vol. 14, No. 2, pp. 141-148.
- Aronfreed, Justin (1970), "The Socialization of Altruistic and Sympathetic Behavior: Some Theoretical and Experimental Analyses," in Bill Puka, ed., *Defining Perspectives in Moral*

- Development*, New York, NY: Garland Publishing.
- Batson, Daniel C., John M. Darley, and Jay S. Coke (1978), "Altruism and Human Kindness: Internal and External Determinants of Helping Behavior," in Lawrence A. Pervin and Michael Lewis, eds., *Perspectives in Interactional Psychology*, New York, NY: Plenum Press.
- , Bruce D. Duncan, Paula H. Ackerman, Terese S. Buckley, and Kimberly Birch (1981), "Is Empathic Emotion a Source of Altruistic Motivation?" *Journal of Personality and Social Psychology*, Vol. 40, No. 2, pp. 290–302.
- Cavanaugh, Lisa A., James R. Bettman, and Mary F. Luce (2015), "Feeling Love and Doing More for Distant Others: Specific Positive Emotions Differentially Affect Prosocial Consumption," *Journal of Marketing Research*, Vol. 52, No. 5, pp. 657–673.
- Coke, Jay S., Daniel C. Batson, and Katherine McDavis (1978), "Empathic Mediation of Helping: A Two-Stage Model," *Journal of Personality and Social Psychology*, Vol. 36, No. 7, pp. 752–766.
- Duclos, Rod J. and Alexandra B. Barasch (2014), "Prosocial Behavior in Intergroup Relations: How Donor Self-Construal and Recipient Group-Membership Shape Generosity," *Journal of Consumer Research*, Vol. 41, No. 1, pp. 93–108.
- Eisenberg, Nancy and Paul A. Miller (1987), "The Relation of Empathy to Prosocial and Related Behaviors," *Psychological Bulletin*, Vol. 101, No. 1, pp. 91–119.
- and Paul H. Mussen (1978), "Empathy and Moral Development in Adolescence," *Developmental Psychology*, Vol. 14, No. 2, pp. 185–186.
- Gouldner, Helen P. (1960), "The Norm of Reciprocity: A Preliminary Statement," *American Sociological Review*, Vol. 25, No. 2, pp. 161–178.
- Gutsell, Jennifer N. and Michael Inzlicht (2010), "Empathy Constrained: Prejudice Predicts Reduced Mental Simulation of Actions During Observation of Outgroups," *Journal of Experimental Social Psychology*, Vol. 46, No. 5, pp. 841–845.
- Harris, Mary B. and Lily C. Huang (1973), "Helping and the Attribution Process," *Journal of Social Psychology*, Vol. 90, No. 2, pp. 291–297.
- Ho, Violet T., Denise M. Rousseau, and Laurie L. Levesque (2006), "Social Networks and the Psychological Contact: Structural Holes, Cohesive Ties, and Beliefs Regarding Employer Obligations," *Human Relations*, Vol. 59, No. 4, pp. 459–481.
- Hoffman, Martin L. (1975), "Developmental Synthesis of Affect and Cognition and Its Implications for Altruistic Motivation," *Developmental Psychology*, Vol. 11, No. 5, pp. 607–622.
- Krebs, Dennis L. (1975), "Empathy and Altruism," *Journal of Personality and Social Psychology*, Vol. 32, No. 6, pp. 1134–1146.
- Krol, Sonia A. and Jennifer A. Bartz (2021), "The Self and Empathy: Lacking a Clear and Stable Sense of Self Undermines Empathy and Helping Behavior," *Emotion*, in print.
- Mehrabian, Albert and Norman Epstein (1972), "A Measure of Emotional Empathy," *Journal of*

- Personality*, Vol. 40, No. 4, pp. 525-543.
- Miller, Paul A. and Nancy Eisenberg (1988), "The Relation of Empathy to Aggressive and Externalizing/Antisocial Behavior," *Psychological Bulletin*, Vol. 103, No. 3, pp. 324-344.
- O'Brien, Daniel T., Andrew C. Gallup, and David S. Wilson (2012), "Residential Mobility and Prosocial Development Within a Single City," *American Journal of Community Psychology*, Vol. 50, No. 1-2, pp. 26-36.
- Oishi, Shigehiro (2010), "The Psychology of Residential Mobility: Implications for the Self, Social Relationships, and Well-Being," *Perspectives on Psychological Science*, Vol. 5, No. 1, pp. 5-21.
- , Alexander J. Rothman, Mark Snyder, Jenny Su, Keri Zehm, Andrew W. Hertel, Marti H. Gonzales, and Gary D. Sherman (2007), "The Socioecological Model of Procommunity Action: The Benefits of Residential Stability," *Journal of Personality and Social Psychology*, Vol. 93, No. 5, pp. 831-844.
- Parsons, Talcott (1951), *The Social System*, Glencoe, IL: The Free Press.
- Reed, Americus and Karl F. Aquino (2003), "Moral Identity and the Expanding Circle of Moral Regard Toward Out-Groups," *Journal of Personality and Social Psychology*, Vol. 84, No. 6, pp. 1270-1286.
- Sampson, Robert J. (1988), "Local Friendship Ties and Community Attachment in Mass Society: A Multilevel Systemic Model," *American Sociological Review*, Vol. 53, No. 5, pp. 766-779.
- (1991), "Linking the Micro- and Macrolevel Dimensions of Community Social Organization," *Social Forces*, Vol. 70, No. 1, pp. 43-64.
- and Byron W. Groves (1989), "Community Structure and Crime: Testing Social-Disorganization Theory," *American Journal of Sociology*, Vol. 94, No. 4, pp. 774-802.
- , Stephen W. Raudenbush, and Felton J. Earls (1997), "Neighborhoods and Violent Crime: A Multilevel Study of Collective Efficacy," *Science*, Vol. 277, No. 5328, pp. 918-924.
- Shaw, Clifford R. and Henry D. McKay (1942), *Juvenile Delinquency and Urban Areas*, Chicago, IL: University of Chicago Press.
- Tönnies, Ferdinand (1887), *Gemeinschaft und Gesellschaft*, Darmstadt, Germany: Wissenschaftliche Buchgesellschaft, in Charles P. Loomis trans. and ed., *Community and Society*, New York, NY: Dover.
- Touré-Tillery, Maferima and Ayelet Fishbach (2017), "Too Far to Help: The Effect of Perceived Distance on the Expected Impact and Likelihood of Charitable Action," *Journal of Personality and Social Psychology*, Vol. 112, No. 6, pp. 860-876.
- Triandis, Harry C. (1989), "The Self and Social Behavior in Differing Cultural Contexts," *American Psychological Association*, Vol. 96, No. 3, pp. 506-520.
- Wang, Yajin, Amna Kirmani, and Xiaolin Li (2020), "Not Too Far to Help: Residential Mobility, Global Identity, and Donations to Distant Beneficiaries," *Journal of Consumer Research*, Vol. 47, No.

6, pp. 878–889.

Winterich, Karen P., Vikas Mittal, and William T. Ross, Jr. (2009), “Donation Behavior Toward In-Groups and Out-Groups: The Role of Gender, and Moral Identity,” *Journal of Consumer Research*, Vol. 36, No. 2, pp. 199–214.

参考資料

American Red Cross HP, “What’s the Difference Between a Hurricane and a Typhoon?”

<https://www.redcross.org/get-help/how-to-prepare-for-emergencies/types-of-emergencies/hurricane/hurricane-vs-typhoon.html#:~:text=If%20it's%20above%20the%20North,we%20call%20it%20a%20typhoon.> (最終アクセス 2022 年 1 月 25 日)。

CAF World Giving Index HP, “CAF World Giving Index 2021 A Global Pandemic Special Report,”

https://www.cafonline.org/docs/default-source/about-us-research/cafworldgivingindex2021_report_web2_100621.pdf (最終アクセス 2022 年 1 月 25 日)。

Giving USA HP, “Giving USA Annual Report,” <https://givingusa.org/giving-usa-2020-charitable-giving-showed-solid-growth-climbing-to-449-64-billion-in-2019-one-of-the-highest-years-for-giving-on-record/>

(最終アクセス 2022 年 1 月 25 日)。

日本ユニセフ協会 HP, <https://www2.unicef.or.jp/bof/bo.html> (最終アクセス 2022 年 1 月 25 日)。

Stacker HP, “Countries Most Affected by Tsunamis,” <https://stacker.com/stories/3824/countries-most-affected-tsunamis>

(最終アクセス 2022 年 1 月 25 日)。

調査票

遠方の他者に対する寄付意向に関する消費者意識調査

<ご挨拶>

私は現在、卒業論文を執筆中であり、その論文に用いるための消費者データを必要としています。

この調査は、純粋な学術的な調査であり、特定の営利企業に利用することはありません。

また、ご回答頂いた内容は統計的方法によって処理いたしますので、個人単位での情報が外部に漏れいすことは絶対にございません。

ご多忙のところ大変恐縮ではございますが、上記の旨をご理解頂きますと、本調査へのご協力の程、宜しくお願い申し上げます。

慶應義塾大学商学部 小野晃典研究会
第18期 加藤愛奈

【0】 あなたの年齢と性別を教えてください。

歳	男・女・無回答
---	---------

【1】 あなたの引越経験の有無を教えてください。

※なお、この場合の引越とは、都道府県あるいは国を跨ぐ居住地の移動を指します。

該当する例：東京都→神奈川県、日本→アメリカの引越

該当しない例：東京都港区→東京都渋谷区の引越

有・無

次のページへお進みください。

【2】 次の場面を想像してください。

あなたは先ほど、アルバイト先でポーナスとして、1,000円を受け取った。

帰りに立ち寄ったスーパーのレジで、あなたは写真のような2種類のポストターを提示され、寄付を頼まれた。

【ポストターA】

ハリケーン被害

アメリカのA町で
大きなハリケーンが発生し、
家や学校が吹き飛ばされました。



【ポストターB】

津波被害

アメリカのB町で
大きな津波が発生し、
家や学校が流されました。



【3】 左記の場面を踏まえて、以下の質問にお答えください。

ポーナスの1,000円を全て寄付する場合、以下のうち、あなたが探ると考えられる行動を1つ選択して、番号に○をつけてください。

1	A町のハリケーン被害に多く寄付する。
2	B町の津波被害に多く寄付する。

ご協力ありがとうございました。

調査票

遠方の他者に対する寄付意向に関する消費者意識調査

<ご挨拶>

私は現在、卒業論文を執筆中であり、その論文に用いるための消費者データを必要としています。

この調査は、純粋な学術的な調査であり、特定の営利企業に利用することはありません。

また、ご回答頂いた内容は統計的方法によって処理いたしますので、個人単位での情報が外部に漏えいすることは絶対ございません。

ご多忙のところ大変恐縮ではございますが、上記の旨をご理解頂きますと、本調査へのご協力の程、宜しくお願い申し上げます。

慶應義塾大学商学部 小野晃典研究会
第18期 加藤愛奈

【0】 あなたの年齢と性別を教えてください。

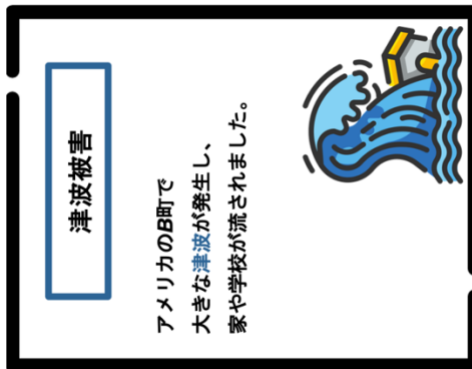
歳	男・女・無回答
---	---------

【1】 次のポスターを提示されたら想像してください。

【ポスターA】



【ポスターB】



次のページへお進みください。

【問】上記のポスターを踏まえて、以下の質問にお答えください。

次の質問について、「1：強く否定する」～
「7：強く同意する」のうち、最も当てはまる
1つの番号を選択して○を付けてください。

- 1 : 強く否定する
- 2 : 否定する
- 3 : どちらかといえば否定する
- 4 : どちらでもない
- 5 : どちらかといえば同意する
- 6 : 同意する
- 7 : 強く同意する

次の質問について、「1：強く否定する」～
「7：強く同意する」のうち、最も当てはまる
1つの番号を選択して○を付けてください。

- 1 : 強く否定する
- 2 : 否定する
- 3 : どちらかといえば否定する
- 4 : どちらでもない
- 5 : どちらかといえば同意する
- 6 : 同意する
- 7 : 強く同意する

1. 上記のシナリオについて、あなたはどのように感じましたか。

A町が遭った被害は、自分（あなた）の 地元と関連性が強いと思う。	1	2	3	4	5	6	7
B町が遭った被害は、自分（あなた）の 地元と関連性が強いと思う。	1	2	3	4	5	6	7

2. 上記のシナリオについて、あなたはどのように感じましたか。

被害に遭ったA町に対して、 自分（あなた）は共感する。	1	2	3	4	5	6	7
被害に遭ったB町に対して、 自分（あなた）は共感する。	1	2	3	4	5	6	7

ご協力ありがとうございました。